
とりあえず革命！？

無軌道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず革命！？

【Nコード】

N1087R

【作者名】

無軌道

【あらすじ】

主人公が転生、革命、なんやかんや教祖
政争、戦争、聖戦なんやかんや統一
そんな、主人公のハートフルボッコストーリー…失恋いや、失礼
ハートフルラブコメシリグロデンスストーリー

目覚め、挨拶、就寝

はっ…どこだここ？

周囲にはヨーロッパ然とした、高級そうな家具

後ろには、慌てて駆け寄るメイド…

これは、一体どうしたこと

「大丈夫ですか若っ！？」

と、言いつつ肩を揺すられる

正直痛い、焦っているのか強めに揺すられた

まだ、首も据わったばかりだろう年齢な…まじかよ

いやいや、まあ自分が幼児にアンチエイ

ジングな驚愕の事実には捨て置くとして。

対処すべきは、背後のメイドさん

放置したらいずれ後頭部と肩甲骨が挨拶する時がきてしまうかもしれない

よし、ここは一つメイドさんを安心させる言葉をかけるとしよう

「だ、大丈夫だ問題なっ」

「ほ、本当でっ『ごきっ』」喜びの余り、力が入り過ぎたのか…なるほど

おはよう、肩甲骨…二度と会わないことを願うよ

「わ、若ーー！…大変です、一番の水魔法使いを呼ばないとっ」

といって駆け出すメイド

「…一番良い医者頼む」

といって、俺の意識は途切れた

知らないでっ！？

子供用のベットの足を駆け回るメリーゴーランドのようなものがみえた

しかしこの神、天衣無縫である

貴方は死にました。

…つて、なんじゃそりゃああああ！？

起きたようです。

え、な…なに？夢！？

いえ、ここは選別の間という、死者の魂が最初に導かれる場所です。

は…？つまり俺は死んで？選別の間に居るって？

そうなります。

（いやいやいやいや、ちょっと待ってくれ

たしか俺は、此处は俺に任せて先に行けえー

…と冗談で、友人と街を歩いて居るときにフリ付きで言ったら何故か目の前にナイフを持った強盗？

らしき人物が現れ、フリーズ

もみ合ってナイフが刺さり…あれえ、俺死んだじゃんっ！！）

あなたは死にました、思い出しましたか。

え、ええ…少し混乱していたようです

ようやく思い出しました

そうですか、それは良かった

では、あなたにしていたきたい事が有ります。

えっ？えっとお…今の俺に、出来る事はそうそう無いと思うのですが？

前略：それは短かった…2

ええ、ですが今のあなただからこそ出来る事もあるのですよ。

「え！なぜか死亡フラグを建てられる俺に出来る事…ですか？」

…そこは、別に無くて良いんですが
まあ、死んだアナタだから出来る事です。

「し、死んだ俺だから出来る事…？うらめしや…しかし、関係無いのを崇めるのは嫌だから…この世の犯罪うらめしや…とか？よし、俺の決めゼリフはそれにしよう。」

…いえ、違います

あなたは、幽霊ではなく靈魂つまり

順当に輪廻転生に組み込まれる魂でして

通常ならば、一度魂をまつさらなエネルギー体だけにし

世界に魂として、輩出するのですが…

人間は進化して、外部魂の吸収性質を持つ

特異魂を作り出してしまったようで…

「？それがあるとどうなるのですか」

簡単に言えば、エネルギー状態の魂の中に入れると

自身の魂が吸い取れる容量分、魂を吸収し

その異様に増幅した魂を持ったまま転生する事になる

「…な、なるほど

という事を俺に説明するって事は
・・・え！俺っ！？」

そうです

「

それは短…後略（前書き）

どうしようも無いほどの、矛盾への指摘を受けたので訂正
ぶにぶにさんありがとう

それは短…後略

「…い、いやそうですって簡単に言われても俺は、どうなるんですか？」

神は、罪によって判断しました

そもそも進化の秘宝故の悲劇なので魂の消滅も事情によりけり、よって

罪深き物は殺し罪軽き者は…特別な手段をと

「…それで俺はどうなったんでしょうか？」

あなたは、罪軽き…加えて言うなら不幸な人故に神はあなたを別の世界に送ります

「…それは、ありがとうございます」

では、さようなら

次の世界ではあなたが幸せ足らん事を

はっ

二度寝してしまった、ようだ…

流石子供のワガママボディ、言うことを聞かないな

…さて、まずは現状の確認をしよう

幼児…と言うか乳幼児が寝るであろっベツトに

俺の眼前を駆け回るメリーゴーラ…メリーゴーでいいや、メリーゴー

服は、締め付けが緩く着心地の良い…カシミアか何かの毛製品

に…それで、後は、横で寝ている金髪の美人

？誰だろうこの人、メイド…じゃないな

メイドの証《カチューシャとメイド服》を装備して無いし

んじゃ、母…親？こんな美人が？俺の？

ひゃっほーいっ！…つ・ま・りこの美形の血が俺に流れてる訳だよ

…となると、前世では彼女がいない、それは天地開闢から定められ

し運命

みたいに、悪夢が如くモテなかったが

美形となれば話は別、俺は今回の人生…モテまくってやるぜっ

よし、気分も『最高にハイってやつだぜー！…！ヒヤッハ！』

てな感じだから、そのまま素性を思い出そうっ

キングクリムゾン

作者の声：一人称の人物紹介正直たるいんで

三人称とします

転生前

主人公：故野 丙 （ゆえの ひのえ）本編では恐らく余り

出てきません

性格・温厚、特定人物に甘い、鈍感、条件に該当する場合冷酷

本質・中立

能力値はまた今度

転生後

主人公：ヴァルム・フォン・アーレル

ゲルマニア公爵第三子爵

両親は

母は、隣に寝ている水メイジ

アストニア・フォン・アーレル

出身は平民、第一側室で二番以降は無し

一子、二子は正妻の子供

父は、火のメイジ

グラドニル・フォン・アーレル

現在は…多分一年で、つかまり立ちが出来るようになった頃。

寝起きドツキリ（前書き）

二年経ったつまりはそう言うことです

寝起きドッキリ

「ようやく、起きたのね」

「…おはよう、母さん」

ビ、ビったー…母さん、テンションが『ヒーハー』の時に話かけてくるんだもの

火が吐けるかと思った

ま、冗談として

…どうしようかな？いや、どう対応しようかという話で

子供だけど天才…とか、大体非業の最期末路をひた走るし
悩有る鷹は爪を隠すと言うし…

年齢相応を目指すでしょう

side アストニア

あれ、おかしいわね

この子の目に、理性的な光が見えたわ

この子の年齢だと、こんな表情もそんな瞳も、まだしない筈なのに
…前から、発作的な頭痛があって

頭に、最悪障害が有るのでは無いかと思われていたけれど
それは、違うのかもしれないわね

逆に、優秀過ぎるが故に頭が追いついてなかったのかしら
だとしたら…

side out

ん？母さん、急に考え込んだと思ったら

こんな質問をしてきた

「ねえ、9の次はなーんだ？」

簡単じゃないか、そんなの

「じゅ…」

「じゅ？」

いやいやいや、ちょっとまってよ？

三才児って、分かるのか？

…分からない事に、しておこう

「じゅ…じゅ、ジュテーム？」

「はいはい、母さんも愛してるわよ

それで、9の次は？」

誤魔化せなかったー、なんだこの母さん手強いぞ…

前世なら…め、珍しいこと言うじゃないか

でも、別に何も出さないぞっ

と、リアルツンデレしつつ晩飯が豪華に成ったのに…

「じゅ、ジュースが飲みたいなあ

喉が渴いて…」

と、母さんに言ってみる…？

驚いた顔してるな、何か問題…あったか？

ジュースが飲みたいと、正しい文法で話す

あれ？3歳児童出来なくね？

しいー…まったつつー！？

side アストニア

驚いたわ…この子の年だと、幼児語とか単語の端々を話すぐらいなのに

文法を並び替え、接続詞を付け期待文に変える

…少なくとも、後一年から二年はかかる筈

それを、この子はやった…

て、天才ねっ！？

side out

「か、か、か、母さん？」

「どうしたの、ヴァルム？」

あ、ジュースなんだけど黄色いので良い？」

「え、それはなん…でもなくて

ぼ、僕は眠いので寝たいで…す」

…鬱になる、母さん完璧に俺を試してるな？

あの様子だと、オレンジジュースだけしか

俺は飲んだ事が無いだろう、となると

色を聞かれて、それはなに？

なんて答えてみる…知識が有ることがバレバレじゃないか

「あら？そうなの

それじゃあ、おやすみなさい、良い夢を」

と言って、俺のおでこにキスをする

…ふう、疲れたもう、寝る

side アストニア

ふふっ、これから面白く…出来そうね？

局地的に教育熱が暴走しております…誰かつ援護をつ

翌朝起きた俺は、ワカメを…いや、我が目を疑った

公爵バルドニス・フォン・アーレルが目の前に立っているのだ

「おお、愛しのヴァルムよ具合はどうか？」

「だ、大丈夫で…す」

あれ？でもなんで、覚えてるんだ？

…？昨日はやっぱ、記憶が混乱してたのかね…ま、いいか

しかし、父上髭すごいな、手入れはされてるけど

それに、顔も普通にオッサンだなあ

…っ！？なん…だとっ！？

普通にオッサン！？いや待て、つまり半分私はオッサンの血が？

ま、マジか、半分オッサン？

俺、半分、オッサン…？

そんな…バカなっ、非モテがようやく解消されると思ったのに

し、しかし、まだ希望はあるっ

鏡誰か鏡を持って…！…！…いい！！

side out バルドニス

…凄い百面相だな

だが、なぜ俺の顔を見た途端苦しみ出すのだ？

髭か？髭が悪いのか？くっ、お前が小さい頃は髭を引っ張って楽し

そつに笑っていたのに

…今も小さいか、まあそれはいい

なんたつて今日は、ヴァルム3歳の誕生日

本来なら盛大に祝ってやりたいのだが…

三男ともなると、色々難しい物がある

後で内々に祝うつもりでは勿論あるが
その前に、立派な公爵足るべく
3歳から教育を始めなければならない
頑張るぞ？ヴァルム？

s i d e o u t

凄く嫌な悪寒がしたと思って、父上の方を向いたら…
薄く笑っていた…何が、起こるのっ！？

局地的に教育熱が暴走しかけておりますっ…誰か援護をつ2

「よし、ヴァルムよこれから誇り有る公爵になるため
特訓と勉強を行うぞ…まずは、魔法特訓をつ『バシッ』痛いぞアス
トニア」

「あなたは…何をいきなりこの子にさせようとしているんですか？」
「うむ、魔法のれ…（め、目がマジだ…）練習場を使ってコモンマ
ジックを」

「そうですね、てつきり私は魔力が切れるまで
魔法を唱えさせ、適性毎のカリキュラムをやらせる算段かと

…うちの兵士と同じく」

「ま、まさか…あはははは」

「…父上？め、目をそらさないで父上、父上っ！？」

「よしヴァルムよ訓練場に急ぐぞっ

私が直接見るのは、年に何回かしが無いのだ
朝から夕まで今日はみっちりやるぞっ」

露骨に話変えやがった…

「…勉学の時間も取りたいのですが

まあ今日はいいでしょう、では、行きますか」

…俺の意志を無視した所で、話が進んでいるっ
というか何これ？え？俺まだ、首が据わったば…

あれ、いや普通に歩けるなあ…あれ？

けど、魔法？いやいやいや…あるの？

…よっしゃあつ、いやあ、一度使って見たかったんだよね
魔法って、なんか楽しそうだし

「分かりました、では着替えるので少し待って下さい」
「う、うむ分かった」

あれ？またなにか…敬語か

まあ、いつか

「…よし、まずはコモンマジックからだ
ライト、アンロック、レビテーションが一般的だな
まず、どれからやりたい？」

え？なにその初級マジック、3つ合わせてロミオとジュリエットで
もやるのか？

ちとイメージが違うけれど

まあいいか便利だしレビテーションとか…

よし、最初はレビテーションにしてもらおう

「父上、レビテーションが良いです」

「おお、そうか

では、この杖を持って実行する魔法を考えて
レビテーションと言うんだ」

「はい、分かりました」

『レビテーション』

自分が浮く所を想像して唱える…失敗

「あれ？」

「はははっ、最初からそう上手くは行かないか
よし、お父さんがやるから見ていろ？」

「はい」

「レビテーション」

父親が浮き上がる…しかしこれ肉体だけなのか？
一個体だけにかかっているなら、応用性は低いが…もし全体にかけ
られるなら

「父上、この訓練場の砂をレビテーションで
持ち上げる事は出来ますか？」

「ん？ん、難しいな…一粒ずつ砂を認識しないとならぬから石を、数個同時に持ち上げる事はできるが、レビテーション」

「お…ちなみに、どの位まで持ち上げられるのです？」

「あゝ、魔力にもよるが

数は大体七個位まで

重さは約大人三人分かな、250キロ程度だ」

「分かりました、ありがとうございます」

ほう、これは面白い事ができそうだ

side アストニア

少し離れた所から話を聞いていたけれど

あの年での思考能力、このまま成長したら

ガリアの忌々しいあいつを超える、知謀を持つかも知れない

…まあ、私も負ける気は無いのだけれど

side out

『レビテーション』…失敗

「…ははは、何が悪いのだが」

「すいません」

「いやなに、気にするな苦手な物は誰にでもある

では、ライトの呪文を唱えてみよう」

「はい、『ライト』」

…ふう、なんか失敗したぜっ

いや、転生して俺最強っ！！かと思っただら違っみたいだな…
え、もしかしたら…不幸属性付き主人公？

最悪、主人公ですら無い…

…死ぬじゃ有りませんかあっ！

はあ、ま、何はともあれもう一度ライトの呪文を唱えよう

…前回と同じなのも、芸が無いし

懐中電灯と同じイメージで

「『ライト』」

「お、おお…凄いな

でもなんで、前しか照らさないんだ？」

「さ、さあ…」

イメージするのは

松明の方が良かったかも知んない

しかし、成功した

イメージが良かった…のか？まあ、多分そうだろう

具体的なイメージをすると、成功し易いようだ

… と思ったらそうでも無かった件

「よし、ではアンロックの練習をしよう」

「はい父上」

… 正直アンロックを、活用するときって来るのか？

ん？なんだ、ということは簡単にドアを開けられるのか…
うわぁ

「… しかし、父上

ということとは、簡単に扉を開けられるということですか？」

「うむ、そうなるな

だがまあ、ロックの呪文もあるし

トライアングル、スクエア辺りの使い手の場合、それ以外では空けられん」

「… そうなんですか」

つまり、弱いメイジは身を守れんのか？

えゝ、でもまあ

この世界の人は全員使えるなら、練習不足は危ないということに
あれ？ そういえば、全員使えるんだよね…

ん？

「父上、この世界の人は全員魔法を使えるのですか？」

「はっはっはっ、何を言うヴァルム

魔法を使えるのは選ばれし者達だけ

平民は使えぬよ

… まあ、没落貴族は違うが」

はい…？ 使えないんですか？

え、つまりなに？

地位的に上すぎる貴族が、平民の家に入って

良いではないかゝ、とか簡単に出来るって…？

うわい、間違つとるな

に（前書き）

ギャグシンドロームが…ぐほっ

笑いどころが少ない…ですが、まあ

諦めて投稿します

遅くなりまして申し訳ござ候

に

「なるほど、ところで父上、没落貴族はどういった処遇にあるのでしょうか？」

「ん？ああ（ヴァルムはまだ三歳児…三歳児？三歳、三才？天才？…うん天才児だな

うむ、不思議じゃない…不思議じゃない

俺の常識はまだ大丈夫…まだいける）

ええと、平民からは魔法を使えるため迫害される傾向にあるな
貴族からは、平民という身分であることと

自分達の命を脅かす危険性が有るため

嫌われている者が多い…かな？

まあだが、魔法使いにしか出来ない仕事をする

没落貴族二世、三世連中は村人から好かれて居ることもあるな」

「一世の方は、どうなったんでしょうか？」

「ああ、大体没落しても

プライドだけは貴族…いや、それよりも高い者が多くてな

平民の仕事など御免だと働かんし

平民は、自分達の下僕と考えてる節が有る

そのため、平民を殺して金銭を奪うといった行為も行われる」

「…そうなのですか、ところで件数と没落貴族が関わる

事件は他にどういった種類が？それとその種類毎の割合を教えて貰えませんか？」

「え、ああ（ヴァルムは天才児…天才児

俺とは違うんだ…違うんだ、確かこの頃

俺はマナー教育の中一度だけもら…うっうん…

あゝ、でも確か上の子がこの頃は意志の疎通が出来る位で…

俺の常識は、ま…まだ、大丈夫…ふ、不安だ

あ、アストニアっ！）目で訴えかける

《ヴァルムはどうだっ!？》

《天才ね》

《俺の中の常識が崩壊しそうなのだがっ》

《…諦めなさい?》

常識は崩壊した…」

「ど、どうしたのですか父上?」

いきなり挙動不審になり、母さんの方を向いて

母さんが顔を横に振ると、深刻な顔をして

常識が崩壊したとか言い出したし…いったい何が…

ああ俺か

「いや、なんでもない

あゝ、他には…まあ、ヴァルム?お前が知るにはまだ早い
もう少し、成長してからにきなさい」

「分かりました父上、内容は構いませんので

犯罪の没落貴族の締める割合はどの程度ですか?」

「(…ま、いいか)…把握しきれていない

残念な事に、街が発展したとともに

犯罪の件数は増えてな、自警団と我が家の軍を出して居るのだが
どうしたって、闇は出来る…

それは、人が人である以上仕方の無い事なんだ…」

と、此処までを自嘲気味に俯いて語り

ヴァルムに向き直った

そして

『…ヴァルムは天才とはいえまだ早かったかな』

と言う…つもりだった

「なる程、ですが闇は知識によつて
軽減出来るそうです、どうです父上
平民の学習所をつくつてみては?」

「…そ、その根拠はなんだ?」

「その一、犯罪に対する抵抗手段の学習による

犯罪被害の軽減

その二、仕事に必要な技能を学習させる事により就職させ、金銭面での犯罪を減らす

その三、その平民に戦闘方法を教える事により

犯罪そのものを軽減する…ざっとこんな物ですかね？」

目で訴える

《アストニア…プ、プライドが

俺のプライドがああああああ》

《私も…少し傷ついたわ》

「主人公は、世間話をしてるのと同じ感覚で話しています

前世での周囲が天才なので、自分は若干出来ない方だとも考えています」

主人公 s i d e

…まさか、他の独白入れすぎて主人公の地の文がわかりにくくなる
とは

…？なぜ二人とも難しい顔をするんだろうか

もう、今朝の時点で俺が話せる事は

理解しているだろうから諦めて

普通に話したんだが…まずかっただろうか？

しかし、物語はまだモノローグの段階である

まあ、まずくともいいか

身分差別が横行するなら

直さないと…嬉し恥ずかし学園ラブコメとか

出来ないじゃあ無いですかっ

幼なじみとか欲しい、モテた試しが無いから

一度で良い…切に願う、モテたい

「主人公がモテなかったのは、余りにも視点が違った為です

性格が悪かった為ではないので、悪しからず

…残念ながら自覚しないと、この世界でも余りモテないかと」

side out

「さ、さて

まあ、その話は後で煮詰める（…あらを探す、論破する、何かしな
いと

大人の…威厳が）

として、まずはアンロックを練習しようか」

「はい、父上」

（魔法には、精密な想像力が必要なようだ

つまり、俺の想像力が足りないという事か

では、アンロックには鍵が開く工程を想像

鍵穴、形、整合、回転…それで開く

まあ、この時代磁石式は無いよな…

うん、その筈だ電子ロックもなく

シリアルとごく普通のドラクエみたいな鍵だと思う

よし、なら鍵穴から開け…あれ

魔法には、距離とか物理的概念はあんま関係無い…んだよな
なら、後ろ側の鍵締める所を念力で開けりゃあ…良いのか
うわい、簡単だー)

『アンロック』

カチャ、簡単に開く

「…ん、流石だな

では、もう一度レビテーションを練習しようか」

「はい、父上」

(今度は、重力の認識から…かな？

体にかかる付加、手を上に持ち上げる時にかかる重さ

これを認識、その軽減の概念…難しいな

では、引き合う物が剥がれる…その概念で唱えてみるか)

『レビテーション』

…その瞬間、確かに俺は浮いた

地面からも、そして周囲からも

【ビリッビリッ】

…ああ、なる程

引き合う物が剥がれて、対象が俺の周りだったから

服の結合が剥がれて、霧散したのね

んでもって、俺の認識が甘いせいか

所々で、千切れて…

盗賊に襲われたみたいに、服がボロボロになったと…

「なんじゃこりゃああああああああ」

「だ、大丈夫、でわないなヴァルム…

急いで替えの服を

頼む、アストニア」

「はあ、それよりもまず

その無駄にかさばる豪華なローブを

ヴァルムに掛けてあげなさい

服は、すぐに持って来るから」

「う、うむ

頼んだぞアストニア」

「分かったわ」

「お願いします、母上

ありがとう、父上」

はあ、先があれだ…

残念だな、主要ストーリーではまだ、1日目の昼辺りだっ！！（前書き）

そろそろ飛ばしマッスル

残念だな、主要ストーリーではまだ、1日目の昼辺りだっ…！

「服を持って来たわよ」

「ありがとうございます、母上」

ま…魔術考察は程程にして

ズタズタになった心の…違った

ズタズタになった服の上に、新しい服を纏わないと

…なんか、色々隠しきれない

しかし、なんでこんな大人の階段登ったほうの

魔法少女みたいな目にあわにやなんのか…

ふう、やっぱり不幸属性付きなんかなあ

…はあ

行間

着替え終わった、父上にめっちゃ重いローブを返す

「父上も、ありがとうございます」

「ああ、どういたしまして」

「では、もう一度やります」

「う、うむ」

先程の失敗魔法の原因が分からんため

…急いでやると危険かもしれん

それでもやりたいのか？」

「はい、父上」

少し、考え違いをしていたと言う事が分かりました

次は成功すると思います」

「そうか、分かった」

「では」

認識する対象が曖昧な設定だったからだろう

次は、地面からの力を切る…

難しいが…時間をかけ、意識を強めるっ

ここだっ

『レビテーション』

う、浮いた…

「…まずは、成功おめでとう

しかし、お供に訓練所を持って行くのは止めてくれ」

「へ…？あ」

俺は、一応成功したが

訓練所の地面を半径三メートルほど持って行ってしまった

…何はともあれ、俺の魔法は制御が一番の課題のようだ

これの次の時系列を飛ばしたりしたい、地震怖し

「しかし、ヴァルムよいつ練習しておったのだ？」

「練習…ですか？」

「ああ、まさか今日一日で初級とはいえ魔法を3つ習得など…
そんなことが出来たら、国が揺れるわ」

「は、はあ…」

…一日ですがなにか、とは言いにくいなあ」

脳あるた（ryって言うのも有るし

しかし、事ここに至っては俺が天才だと思われたほうが
政治に介入出来るかね…？

うむ、子供が大人に対し口答えが許され無い理由は
経験と知識、それと力の差

庇護下にあると言う事実だからなあ
この内の半分を封じ込められるなら
多少のリスクは背負おうかねえ

よし

「父上…実は」「なんだ、ヴァルム
自分の特性を探したくなったのか？」

まあ、あれは一人ではやりにくいからなあ」

「いえ、違います…それも有るんですが
今日俺が覚えた魔法は3つです」

「…は？え」と

お前が3歳なのは知っているぞヴァルム」

「ではなく、魔法が3つです」

「魔法が？年ではなく」

「はい」

「あ、ああなる程

普段はこれ以外を練習していたと

「つまりはそういう事だな？」

「それも違いました…」

「今日初めて魔法の練習をしました」

「はい？」

「ということはないか？ お前は今日初めて魔法の練習をし

「3つ習得した……そういう事か？」

「はい」

「ええええええええええ！！？」

「アストニアツ!？」

何？

「頭が痛いっ」

『そうね、私も少し目眩がするわ』

「ヴァルムは相当に天才のようだな……？」

『ええ、そうね』

『となると……これは誕生日パーティーを開いた方が、いい……かも知れんな』

政治の道具にヴァルムをつ……と言いたい所だけれど

「ヴァルムなら逆に利用しそうね？」

「ああ、そうだ」

我が家の自力が上がる事を目論んで

パーティーを開くもよし

開かずヴァルムの力を隠すもよし……

しかし何にせよ、ヴァルムが動けるようにした方が利がでる

そのためには、他家にもしらしめんとならん

故にパーティーを開く

我が家の力は大きいが

そこにヴァ
ルムが加わると……

大概の奴に敵視される恐れがでるからな」

ええ、それを防ぐ為にも

擦りよる機会を与え、我が家に組して貰う

立場的にも経済的にも我が家を敵に回したいものはそう多く無いから』

『…居るのは利益独占を狙う』

腐敗貴族どもだからなあ、潰して構わん』

『ではあなた？それをふまえてどうします？』

『レッツ・パーティーだ』

訓練？違う…サバイバルだっ

『とは言っても、今年は無理だろう』

『まあ、そうよね』

暑くなっちゃったけど、良く考えれば

まだヴァルムがそこまで強くなると決まったわけでもないし
第一、今から言っても集まらないしね』

『そうだな、なれば』

ヴァルムには強くなって貰うか

より良い世界の為に』

『そうね…なぜか学問は問題なさそうだし』

当分は魔法の練習をして、来年のヴァルムの誕生日に
パーティーをしましょう？。』

『ああ、了解だ』

（何故だろう、訓練フラグが立った気がする）

その時、両親の瞳が黒く光った気がした

一週間後

気のせいでは無かったっ！！

今俺は、森の中で杖と短剣だけでサヴァイヴァル中…

それでねっ、普通の動物だけかと思ったら
普通に魔物がいるんだっ、あはっ！？
しかも、オークだよオークっ
ドットメイジに任せるなってっ…

side バルドニス

うむ、森の中でヴァルムを放ってみた

…その後、魔物が居ないはずの我が森（訓練でやっちゃったZE）
に、森林火災で逃げてきた魔物が
移住してきたと連絡が…

しかも、ヴァルムを入れた4日後に…

いや、広いのと…ここらを守ってるのが

街を離れられなかったと言うのも有ったし

俺が政務で、都市に向かったからなあ

…隠れてやってたから、付いて来ていると思っていたらしい

…ヤバいっ

side out

「ははははっ、こんにちは森のみんなっ

僕は新しいなかま…のっ！？」

オークの棍棒が俺に降りおろされる…

即座に避ける…

（だゝめだゝ、不幸フラグ一級建築士？

死ぬぞ…これ）

「だけれど、死にたくない…

ならばヤルっ」

【レビテーション】

短剣と自分にかける

急所は…目えええええええええ

目に短剣を突き刺す、目に刺さるが…

「ははっ…健康的な骨ですね？」

頭蓋骨で止まる

訓練？いいや…バトルだっ！！

「と…上手くいったけれど」

「ふがああああああああっ！！」

「うわあ、凄いこ…ん？」

《ガサガサ》

「…あれ？」

▼オークAは仲間を読んだ

オークB〱Fが現れた

嘘だろっ！？

「死ぬっ、これはマジで死ぬ…」

状況は酷く不味い、オークがグルツと周りをとり囲んでいる

オーバーキルじゃないかなあ…

まあ、とりあえず怪我してるオークの所から…

オークB

『大丈夫か？』

オークC

『とりあえず短剣を抜くか…』

的なり取りがオークAの周りで行われた様に見える

え？策が失敗？

逃げ場は…上だな、しかし上がるより

捕まるほうが早いかな…

タイミングが重要だな

と、その時

背後のFが棍棒を降り回す気配がした

「させるかつ」

かけていたレベーションを使って上に逃げる

体重が軽いおかげか、スピードが速い

「おゝ、この位だよな…」

年が若くて良かった事って」

安心しかけると、オークが木を引き抜き

こちらに投げつける…

「んな馬鹿なっ!？」

緊急回避…失敗

「ぐあつ、くつ

痛い…この体耐久力低いんだから勘弁してくれ
ん?だが何故ぶ…って考えてる暇はないのかっ」

第二波、第三派が来る

「し、森林伐採反対っ」ギリギリで回避する、レベテーションの操作に慣れてきたようだ

「よしっ…このまま街に逃げ切れ

…絶望したっ、あのクソ親父森の中央に放り込みやがったっ
今の魔力じゃ逃げ切れねえ…

じゃあ…あの崖に逃げるか」

避けながら考えている、器用な奴である

「登って来れない所で、地理的優位を保ち

岩とか木とかを落として退却させるっ」

そうと決まれば、行動は速い

崖に向かって全力で飛ぶ

この際、あまり足の速くないオークは
走りながら、木を投げることが出来ず

崖まで全力のマラソンである

「着いたか…」

「ふぎやあああああああっ」

「うるさっ

うし、崖上にある岩を岸壁に叩き付け岩雪崩を起こす…」

『レベテーション』

と…雪崩が起きるが

小さいなあ…まあ、二匹倒せたからいいか

…その後

「え？崖登れるの？」

普通に崖を登るオーク、まるで訓練された兵士のようなだ

「くっ、『レビテーション』岩岩岩岩木いっ」

上から叩き付ける、さらに二匹倒す

「足りない…」

辺りにあった、めばしいものは投げ終わった

「木を引っこ抜く程の力はないからなあ」

どうしようかと考えていると

「うがああああああああ」

と叫んで、オークが卵…卵っ！？

を投げ付けてきた

でかい、俺の2から3倍ある…

「…この戦闘に巻き込んで殺すのは

クソっ」

多少、無茶かも知れないが崖っぷちに立つ

「視認…対象認識完了

間に合えっ『レビテーション』」

空中で制止する、そのまま崖上に置く…

間に合った、が

「うがああああああああ」

ヤバイ…すぐそこに居やがる

ならっ

開き直った俺は崖から飛び降りる

『レビテーション』

「ふがああああああああ」

「ばっか」

俺を追ってオークが飛び降りる

「ふぎやあああああああっ……」

ああ、最初に目を潰したオークか

なるほど

さて、ようやく最後の一匹なんだが
なんだか強そうな予感…

登りきったオークは、そこにあつた卵を
またかよつゝ投げる

「あああああつ」

卵の下に回り支える…やはり、先ほどかけた時分かつたが
俺と卵を同時に支える事は出来ない…

緩やかに降下する、そこに

「ふがあああああああああ」

「ええゝ」

オークが木を投げ始める

最初の時程弾幕が濃く無いので

支えた状態でもギリギリで避けきる

しかし、徐々に降下速度が上がる

…仕方ない、木の上に降りよう

投げられた木を避けながら、木の上に着地する

成功つゝ…助かった

だが、あのオーク生かして帰すものかつ

と、オークを倒しに向かった

『レビテーション』

「ふがつ？ふがあああああああああ」

「だから、うるせえよ」

崖に登る、オークは崖っぷちにいた

新魔法

『フラッシュ』

ライトの簡易変更番だ、殆ど変わらんおかげで
すぐに習得出来た

「ふがつ、ふがあああああああああ」

崖上で暴れ始める、崖側から見たら

崖に岩が見える…いや、まあそうなんだが
あれならレビテーションで当てられそうだ
崖に捕まり

『レビテーション』

岩と体を持ち上げる

上に上がると…オークがニヤリと嫌な笑みを浮かべた

訓練？いいや…バトルだっ2（前書き）

今作前作ともにギャグパーと文章構成が緩い…
すいません

訓練？いいや…バトルだっ2

俺の体に向かって棍棒をぶん回す

「くっ」

当たれば致命的、避けるのも難しい…

こうなればっ

オークに向かって突進する

棍棒の根元辺りに当たる…痛い

あばらがひび割れでもしたろうか？

だが、そんなものっ今は、無視するっ

「らあっ」

オークに向かい、膝蹴りをかます

「ふがっ」

は、鼻で笑いやがった…

分かってるさ効かない事位

だが、最後の必殺技に繋げる為に

顔面に近付く必要性があつたっ…

オークの手が迫る、コレが失敗したら死ぬかもなあ

…そう考えながら、オークの耳の中に杖を突っ込む

『エアストーム』

風を杖を中心に暴れさせる、螺旋丸的なもの

…練習方法の部分イメージしたら、かなりやりやすかった

《バンッ》

オークの頭が吹っ飛ぶ

脳漿とか飛び散らせてなかなかグロい…

気持ち悪い

魔力は…まあ下に降りる程度の魔力は残ってるか

確かこの崖の近くに、川が有ったはず

そこで体を洗おう

ふう、終わった
異様に疲れた…

川に向かう途中だが、その前に卵が気になった
「よし、見てくるとするか」

移動中

「さて、卵は…あれ？ひびが入ってる
？途中でぶつけたか…いや、そんな筈は」

と悩んでる最中、卵に次々と割れ目が入っていく
「うわうわうわうわ」

慌てる、だが卵のひび割れは止まず次々と割れる

「うわっ」

とうとう卵が真っ二つに割れ
中から

「真っ赤な…ドラゴン？」が現れた

「きゅい？きゅうい、きゅうい」

「う…ん？なんか親にでも間違われたか？
凄く甘えてくるんだが

…ま、まあ餌じゃ無くて良かった
赤ん坊でも、俺の一、五倍位ある」
と、そこに

「私の子供を取ったのは…あなた？」
火の韻竜その親が現れた

訓練？ではない、説得だ…？（前書き）

どうしてこうなった…

ギャグパートです

ええ、百パーセントギャグパートです

訓練？ではない、説得だ…？

「い、いや

違いましてオークが卵を投げたので
私が保護したんですよ」

「…本当ですか？」

「本当に本当です、誓ってもいい」

「きゅうい、きゅうい（この人お父さんの気がする」

「くつ、嘘だったのですね

この子をこんなに洗脳するなんて…」

「いや、違いますって

少し保護していただけで…ほ、ほら

ド、ドラゴン？あれがお母さんだよ」

「きゅうい？（お母さん？）」

「そ、そうっ

お母さんですよ」

トテトテと母の韻竜に近付く

そして、途中で振り返りこちらに向かつて

「きゅうい、きゅい？（お父さんこないの？」

「…あなたを、、殺すしか」

「いや、何言ってるか其処まで分かりませんでしたけど
幾つか段階すつ飛ばしましたよねっ！？」

「きゅい、きゅいっ！（喧嘩駄目っ！）」

「そ、そうね…ごめんなさい

でも一かじり位なら、いいかしら？」

「いやいやいやいや

一かじりとか可愛く言っても、致命傷ですからね？」

「一ゴックンなら、いいかしら？」

「消化の段階っ！？」

「強情ですね…もう、じゃあ一体なんのモグモグならいいんですかっ!？」

「どのモグモグも、駄目ですよっ

丸呑みか、咀嚼するかの違いでしょう!？」

「反芻します」

「胃に入れて、また戻して咀嚼を繰り返すと液状化ですよっ!」

「反省します」

「そうしてくださいっ」

「人間にするわけ無いじゃ無いですかバーカ」

「うがーっ」

「本性を現しましたねっ!？」

《きらきら》

「本性じゃ有りませんよっ

だから、そんな(やったこれで食える)

みたいな顔は止めて下さいっ」

「全く…しょうがないですね

私も鬼じゃ有りません、有る一個と引き換えに助けましょう」

「俺の命です…とか、言いませんよね？」

「言いませんよ」

「…何ですか？それ」

「あなたの頭部ですっ(ニコッ)」

「同じだよっ」

「違いますよ、ほら命の場合もう体全部でしょう？

でも、頭部なら首から下が全部揃って

ほらこんなにお得」

「驚きのプライスみたいに言ってんじゃねえよっ

結局の所死ぬんだから、変わらねえっ」

「え？じゃあ、丸呑みコースで？」

「飲み放題コースみたいに、言ってんじゃねえよっ」

「呑んだ後は

一晩ゆっくり、胃の中で」

「アフターサービスも充実みたいな話かつ

違うよっ、それは消化の手順だよっ」

「ふう、全くこの程度でギヤアギヤア騒がれても…」

「うん、悲鳴的な意味なら極めて正しい」

訓練？いいや、ギャグ…あれ？

「では、この程度で悲鳴を上げるなど
情けない」

「あげたらあげたで、カプツとやられそうなんですけど…」

「むしろゴクツて感じです…まあ、丸呑みネタは飽きてきたんで
喉越し爽やかとでもいっておきましょうか」

「味の品評を俺に向かっていうなし
というか、本格的に気持ち悪くなってきたんで止めてくれませんか
ね？」

「こちらには、後二時間話続ける用意があります」
「ねえよ」

「しょうがないですね

では、丸焼きと踊り食いの違いについて」

「やめいっ」

「クスクスクス」

「ふう、ところで本当に食ったことは？」

「私を殺しに来た人間を、数回ですかね？」

それ以外は特に…好戦的な火竜は狩られて死にましたし」「それは、
済まないな」

「謝ることは有りませんよ、好戦的と言ったでしょう？」

人と争ったり、支配して食糧を献上させたりと

こちらもちちらで、随分酷い事をしてきましたから」

「そうか、でもあなたは其処まで好戦的に見えない」

「そうですね、自然淘汰と言っておきましょう」

「なるほど、ところでこの子はどうする？」

「…どうしましょうか」

「きゅい？（難しい話は終わった？）」

「ええ、終わりましたよ」

ついでにこいつのライフをゼロにしよう

思っていましたけど、この子が嫌がるので延期にしましたよ」

「思ってたんだ、そして延期かよ」

「ええ、そうですね（にこっ）」

「良い、笑顔だ」

まあ、それはそうとして…

お前は、どうしたい？」

「きゅ、きゅういっ（パパママ一緒）」

「我が愛し子よ…こいつは人間で

更には、我達は夫婦じゃないんです」

「きゅ、きゅういっ！（パパママ一緒！）」

「そ、そう言われても

第一大きさとか形状とか、まったく違うし」

「え？知らないんですか、まあ…無理は無いですねでは」

と、言った後呪文を言ったような言わなかったようなすると

「まあ、服は無理ですがこの位は…」

と、そこには16位のグラマラスな女性が居た

「なるほど…だがまずは服を」

「無いです、諦めて下さい」

「うぐっ…」

「まあ、これであなの言う形態はクリアですね？」

「ああ、まあな…」と、言いつつ目をそらす

「ちゃんと見てくださいよ」

周り込まれた

「うがっ…」

「くすくす…」

間抜けな声それと顔ですね」

思わず赤面していた

「う、うるさいっ」

「こうして見れば可愛いものです」
「瞼を閉じて、抵抗してみる」

「……」

「……」

沈黙

（ちゅっ）

キスされた

「な、な、なにして!？」

「キスですよ、人にもこういう風習は？」

「あるよっ!？だからこそその衝撃」

「からかっただけです」

「ひでえ、オトメンのハートにひびが……」

「直して下さい、心だけ弱い男なんてキモイだけです」

「改めてひでえ」

「」

……ま、しょうがないですかね」

「は、なにが？」

「だから、夫婦ですよ」

「……へ？」

「契約してあげます」

「……は？」

「精霊よ、我等に祝福を……」

「な、なに？」

「婚姻の超簡易版です」

「え？」

「つまり、簡単に言つと……」

夫婦になりました」

「ええええええええええええ!？」

「これからよろしく願いします」

「え？は、はあ」
「きゅい、きゅういっ！」
「やったあっ！」

訓練？いいや…結婚だつ、あれ？

結婚しました…はい？

「すげえ、最年少記録じゃないか？

3歳で子持ちで嫁がいるとか」

「なんか不安そうな顔してますね

何ですか？老後の心配ですか？」

「いや、むしろ幼少期の心配」

「私達の子の事ですか？」

「ナチュラルに言い切ったな

…まあ、別にいいけどさ

それもあるけれど、まず自分の心配？

恐らく、死んだとすれば出奔できるけど

3歳で出奔とか」

「え？3歳なんですか？」

「そうだよっ！？外見を重視しろよっ」

「見てくれに騙されてはいけません

こんなチビ助でも、オークを六体倒して居るんですから」

「うっ、まあそうだが」

「それに種族が違う以上に、大きさとか性別とかにこだわる必要が有りませんよ」

「性別にはこだわれ…って

言っておくが俺は男だぞっ？」

「ああ、そうだったんですか」

「女だと思ってたとっ！？」

「ええ、まあ」

「まじかよ…」

「ええと、顔を洗って出なあ「それは帰れの意味だから」へえ、し
てきなさい」

「直さないのっ!？」

「からかいたくなつたので

まあ、鏡を見てきて下さい

そこに、なかなか可愛い少女がいます」

「いや、将来有望な少年が」

「いませんね」

「くっ、まあ分かってたよっ

この間鏡見た時に、イケメ…というか女の子じゃね？

と、後ろを振り返ったし」

「ははは、後ろにはオークやらさまよってる幽霊やらが居るだけなんですが」

「ええっ!？」

「どうしたんです？ただの悪霊でしょう」

「ただの悪霊とか居るかっ、というか全部の悪霊が駄目だろっ」

「ふむ、気付いてないんですか」

「な、なにに？」

「あなたは悪霊や幽霊を吸収しています」

「へ？」

「そうですね、種族^{ソウルイーター}とでも名付けましょうか」

「え？なにその厨二病」

「厨二…？ああ、悪霊にやられ」

「違うつ、そういう呼び名がぜん…」

「ぜん？」

「全盛期なんだ」

「へえ、そうですね」

しかし…前世とかあるんですねえ」

「んなっ」

「まったく、夫婦の間で嘘をつかないで下さい」

「なんで分かるんだ？」

「増幅された魂、不自然な言葉…」

最初は小さいだけかと思いましたが

年相応のようですし、魂吸収の性質かとも思いましたが

核が大きすぎるのですよ、なのであなたは…

外見が成長していないか、そこに無理やり魂をつめこんだかのどちらかです

そこで、不自然な言葉をあなたは使いました

故に、あなたは転生前の記憶がある転生者です」

「負けた」

「勝ちました」

訓練？いいや、結婚だっ…2

「しかし、どうする？」

「何がですか？」

「いや、俺は転生者だし対応的な」

「ふむ、何が変わるんです？」

「へ？」

「あなたはあなたでしょう？」

魂の質で大体人柄は分かります

転生した所で、何が変わるんですか？」

「は…ははっ

そうだな、俺は俺か

だが…待てよ？つまり魂がおん…」

「あゝ、まあ

優しい性格だとか、いざという時の根性だとか
主に顔とか」

「外見が殆ど全てだよなあ…」

「そんな声ですよ」

「もっ…なにも、言うな」

「そうですか

ところで、住むところが有るのですか？」

「ああ、一応は

大分デカイから、住めると思うが
竜化はあまり出来ないと思うぞ？」

「それは窮屈ですね」

「まあな

だが、人型になれるのは少なく
赤竜は少ないのだろう？」

理由は狩られたからだ」と

「まあ、そうですね」

人と竜には溝が十分有りますから」

「ああ、そうなのか」

「……だけど、お前は其処まで害意は無いようだったが」

「そうですね、食欲はありましたけど」

「おいおい」

「私には、魂の質が見えるのですよ」

ですから、別にあなたは怖くありません」

「魂を吸うのに？」

「魂を吸うのにですよ」

あなたの質は……」

「俺の質は？」

「……知りません」

「え」

「こんな事で私に誉めさせようだなんて」

そうは行きませんか？」

「考えてねえよ」

「そうですね？」

……純粋な所ですかね」

「純粋か？」

「え……ええ」

「あ、忘れてた」

一番大事な事を忘れてた……父親は居るんじゃないのか？」

「ああ、そもそも」

この子は私の子供ではありません」

「へ？」

「この子は、狩られた親の子供です」

人を恨むかもしれませんね」

「はい？」

「ええ、それに私はドラゴンの中でも若く30位ですよ。」

「そ、そうなのか」

「ええ、見かけに騙されてはいけませんよ」

「…そうだな」

つまり、お前は同族の子供を育ててるのか？」

「はい、そうです」

第一、話せる相手が少なくなければ

こんなに話したりしませんよ」

「そうですか…」

「そうです」

(…ま、まあ

珍しい魂だからというのも有りますが)

「まあ、そうですね…」

一区切り付いたみたいですから

体を洗ったらどうですか？

私は葉で服でも作っていますから」

「そ、そうだな」

「おや？また赤くなってきましたね
意識したら、興奮してきましたか？」

「う、うるさい」

「クスクス、可愛いですね」

「うっ…」

「おや？更に耳まで…」

「ふっ…」

「全力で川まで行きましたか」

…ふふっ、可愛いですね」

訓練？そうです、心の訓練です

駆け出す最中に叫ぶ

「煩惱退散っ！！」

その叫びは山に木霊した

「…はずい」

後ろから木霊が聞こえる

「…真つ赤ですよ」

「うおおおおお」

しかし、木霊からは逃げ切れなかった

「…はあはあ、今度は絶対音を超えて走る」

川へ到着

「…ふう、何だろうな

この世界って何故に美人が多いのか…？」

まあ、考えても仕方ないか…

水を浴びよう、そう思っ川に入る

…うわあ、川が血で染まった…どこのギリシアだよと

気持ちいいなあ…けれど少し寒い

この血の染みとかは取れないかもな

なんて事をつらつら考えていると

「うぐっ…」

そういえばあばらがばらば…失礼

あばらにひびが入ってたのか

直せないかなあ、しかし魔力も残り少ないし…

どうしようか？ああ、魔力回復しないかなあ…

ん…？魔力が勝手に回復してきている？

…けれど、拒否反応がある？

どういうことだ…とりあえず止まらないか？
お、止まった

…全ては俺の幻覚でしたとかは止めて欲しい
…ん？なんだ、あれは妖精みたいな聖霊見たいのが見える
疲れてるな、そんで俺に対して怒ってるみたいだ

…メルヘンの国へようこそっ

えっ！？なにこれ、夢幻の類っ！？

最近の疲れから、妖精さんが見えるようになったとっ！？
目をこする…やべえ、更に光の粒らしき物が
そこかしこに見えるようになった

…ええ

メルヘンのく…それはもういいっ
いやいやいや、まあ

ドラゴンがいてオークが居るんだ

そもそもここは、メルヘンの

メルヘンの国によっこ…黙れいつ

うむ、メルヘンの国だし

しかし、今まで見えていなかったものが
突如見えるようになったんだぞ？

…メ「そこが問題だ」

なんか会話出来ないかなあ…

そう思っていると

「お前か？」

我が水の分霊を吸収し始めたのは「

でかい聖霊みたいのが現れた…

ええ…末期か？

「残念ながら私に頭の病気は直せん

致し方有るまい、単なる物よ

話を通じないならば、その魂いただ」

「待って待って、待って下さい

通じてますから、話、大丈夫ですっ」

「本当か…？頭は大丈夫か？」

初対面で頭の心配された

…思わず、頭を抱える

「…手遅れ、か」

「違いますから、大丈夫ですからっ

少し頭が痛くなっただけで、大丈夫ですからっ」

「駄目な物ほど大丈夫だと言っんだ」

「違いますって」

「諦めろ、すぐ楽に…」

「えっ？」

…死亡フラグがたちました

訓練？はい、異常の訓練です

水がうねりをあげて俺に襲いかかる

「うわっ」

倒れこむように、水の中に逃げる

…えーと？状況を整理しよう

多分あいつは、聖霊的な存在で俺が分霊を吸収したから怒っていると
そんで、襲われて今水の中だと…納得できねえ

水流が逆流し始める、水底にある石や岩が

俺にぶつかり始める…まじかよっ

俺は水流に対して体を斜めにし、対岸へ逃げた

「ふむ、知恵が回るようだな

もしかして、本当に無事なのか？」

「そうですっ」

「…それは、難儀だな」

「頭がおかしいように見えるってなら

ぶっ飛ばすぞっ」

「…ほう、その通りだが

私を倒す？馬鹿げてる、出来るならやってみろ」

「了解だよ」

先手必勝、俺は駆け出す

水の聖霊は、無数の水の触手的なを出した

数を重視し、小さい俺の体に必ず当て動きを止めてから

叩き潰す策のようだ…

「…なら」

土呪文、固定化…簡易番を発動

認識が足りないせいだ、ただ頑丈になるだけだった
今はそれで十分っ

「ほう、確かにそれだと動きを止めきれないだろう

だが…機動力が足りんっ」

「はっ、別にそれだけが目的じゃねえ」

と水の聖霊と離れたギリギリ水を避けきれる位置に陣取る

「ふむ、位置取りは見事…」

しかし、逃げ切れるかな？」

『…固定化撃つて、三十秒ほどしないと次の魔法は使えないではっ、どうするか』

俺は水の中に入り、近くのでかい岩と岩を思い切りぶつける
「…なに!？」

水の音の伝達速度は空気中の数倍ある

そのため、機動力がたりずとも

相手には届く、そしてそれだけの振動が加われば勿論

《ぱしゅん》

水の聖霊より遠く、俺に近い触手の幾つかが消える

「ふっ、確かに

魔法による水の制御は外部や内部からの衝撃を

御しきれなければ、霧散する

それが、本体である私も水ならばなおさらと

そういう訳かつ、考えたな単なるものっ」

「ああ、そこでこれで…チェックだ」

触手が消え、余裕が出来たところで

ちようど三十秒経った、そこでウィンドを使って着地を無視して加速し

水の聖霊に体当たりする

「ふっ、だが単なるものよ

私は水だ、単なるものの攻撃など当たらんよ」

「そうかもしれない、しかし

俺は死にたくないっ」

「ふふっ、決め台詞がしまらんやつめ」

俺は、水の聖霊にぶつかる直前

魂を最大限で吸収したいと、そう願った

「…ん！？なっ

そういうことかつ、まさか私が倒されるとはな
見事…と言って置くか」

「ははっ、だろう？」

といって、俺の意識は途絶えた

訓練？はい、起きましょう

「起きろ、単なるものっ
起きろっ！っ！！」

《ペシッ》

何か水に叩かれたような感触
つて水っ！？

反射的に体を起こす

「がはっ、ごほっ」

…？

「単なるものよ、起きたか…
死んだかと思っただぞ」

「なにが？」

「…簡単に言えば、水の中で気絶した」

「あ、ああ」

なるほど、ところでお前はどこに居るんだ？」

「うむ？お前の中だ」

「中？吸収しきったのか」

「ああ、油断した」

「…そうかい、ところで

顕現化出来るのか？」

「お前が強く願えばな」

「そうか」

詳しいディテールを詰め、水の聖霊の顕現化を願った

「うむ、出来たか…っ、お前は

何を私を裸に顕現化させているのだっ」

《ぼくっ》

「ぐはっ、ギャグで鳴る音じゃねえぞっ」

「それが罪の重さだっ」

「重いなあ…しかし」

お前って羞恥心有るのか？」

「うむ？お前の中が、住処となった為

多少感情も共有しているようだ」

「なるほど…」

「それにしても、単なるものに随分私を近づけたな」

「ああ、確かに随分上手くいったな」

「ジロジロ見るなっ」

《ゲギリッ》

「いてえっ、腕が変な方向に半回転したぞっ」

「ふんっ、知ったことか」

「…直してくれませんかねえ？」

「ふんっ、まず服を用意しろ」

「了解」

「フリフリがいいぞっ」

「…了解」

フリフリの服を願う

「おお、なかなかセンスが良いでは無いかっ」

「そうか、じゃあ腕を直してくれないか？」

「ふ…ふんっ」

「あの…腕」

クルクルと回ったりしている

…ゴツイ鎧を願う

「な、何をするっ」

「腕を直してくれませんかねえ？」

「ふん、仕方有るまい」

「いてえいてえいてえっ、そっち逆だから一回転しちゃっからっ！」

「別に形は同じだから、良いでは無いか」

「いや、人は一回転したら腕使えなくなるからっ」

「そうなのか、しょうがない」

腕が正回転し、元の位置に戻る

「ついでにあばらと打撲を直しといたぞ」

「…ありがとうございます」

「おお、もつと誉める」

「最高、流石、感謝する、お前が一番の癒して…」

「も、もういい…」

「恥ずかしいのか？」

「う、うるさいっ

とにかく服を戻せっ」

「ほいほい」

フリフリの服を願う

「う、うむ

センスはいいなっ」

「喜んでもらえて何より」

「…ああ、ところで単なるものよ

お前の内に住むとなると、名がないと不便だ
名を付けるとよい」

「そうだなあ…

少し考えさせてくれ」

「う…む、そうか

まあそうだな、急いでやるものでも無いか」

と言って少し残念そうな顔をする

「まあ、良い名前を考えるから」

「そうか…任せた」

「ん、ああそう言えば

あいつの名前を聞くの忘れてた」

「アイ…ッ？」

「ああ、嫁」

「嫁っ!？」

「ああ、新婚ホヤホヤ電撃結婚」

「んっ？出会って、どの位なんだ？」

「五分」

「五分っ！？」

「最近はどうなってるんだ…」

「…さあ」

「…ふむ、近くにいるのか？」

「ああ、すぐそこだ」

「連れてけ」

「いやまあ、俺の中が住処なら
いずれ、会うと思うが…」

「そうではない、顕現化させた状況でだっ」

「はいっ？」

「まあ、いいけれど」

「そうか、では手を繋げ」

「なぜっ？」

「うむ、水の中ならば」

「顕現化を補助出来るのだが」

「でると、姿を保つのが難しい」

「そうなのか？不便だな」

「お前の力が不足しているからだぞ？」

「全回復したならば、そんな事にはならないだろう」

「そうか…ところで」

「顕現化している際に、姿を保てなくなるどうなる？」

「そうだな、近くにお前が居れば」

「すぐに戻れば良い…居なければ」

「…居なければ？」

「…どうなると思う？」

「き、消えるの…か？」

「ふふっ、そう残念そうな顔をするな
単に回復に時間が必要なだけだよ」

「そ、そうか…」

「ほっとした顔だな…ふふっ」

「う、うむ」

「ふふっ、そうか」

まあ、では行こうか？」

と言って手を差し出す

「了解だ」

移動中

「今戻った」

「ええ、お帰りなさ…誰ですか？そいつ」

「ええと、話せば長くなるのだけれど…」

「魂の契約者だ」

「は？」

「は？」

ドラゴンにキッと俺を睨みつけた

「へ？」

「新婚1日目で浮気ですか」

この下衆野郎がっ」

「違っ……」

《ドグラッシャアッ》

「げぶらあっつ！？」

…長くなりそうだ

訓練？はい、言い訳の訓練です

竜化した

「ま、まずは話を…」

「聞く耳持ちません、バーストブレスッ」

「とりあえず、逃げろっ」

「そうさせてもらっ」

左右互いに違う方向に逃げる

木に当たらないように配慮したのか

威力は其処まで強くは無く、また其処まで広範囲では無かった

「その優しさにありがとう」

「良い台詞っぽく、言ってんじゃないですっ！

ネットブレスッ」

「何っ！？」

網目上にブレスが広がる

「ふむ、面白いな

対処すると気圧の差がでて、熱風と共に

相手を取り囲むのか、何もせねば確実にダメージがある、面白い…

だが、まだ甘いな」

「…確かに、網目が甘い」

「「ああ、あんたちっちゃいしね」」

「うっさいわっ」

と言って2人を見る、ドラゴンはそのままだが

水の聖霊の方は軟体動物のように体をくねらせていた

「おおっ、柔らかいな」

「ふふん、元元水だからな」

「うん

そして、其処まで柔らかいと気持ちわ…」

「な、なにっ！？あ、あちっ」

「む、無理に戻さ無くとも…」

「う、うるさいっ…あっ」

「おいっ!？」

あいつは言っていた、対処すれば気圧差で周りの熱風が押し寄せるとあいつの体は水…つまり

「大丈夫かつ…」

「うわぁあっ…」

「くっ、しょうがないぶつつけだが」

『スコール』

「えっ…? そんな、その魔力っ!？」

上空から集中豪雨が襲う

炎は全て鎮火した

「…ありがとう、助かった」

「礼には及ばんよ」

「じゃあ、前言を撤回する」

「ええ…」

「よそ見をするな次が来るぞ」

「…了解」

「どこでどうしたか知りませんが
凄い魔力になったじゃ無いですか」

『パニツシュプレス』

「今度は消えるのかっ?」

「脅しかもしれないぞ」

事実何も見えない、だが口の方には向かわないように全力で逃げる
しかし

「…暑いな」

「そうね」

「あ、そういう事が…」

「そうみたいね」

「周囲の温度だけを上げる魔法…って

死ぬわっ」

『スコール』

集中豪雨がまた訪れる

「引っかかりましたね、この魔法には二つ効果があるのです

一つは、温度を上げること…もう一つは」

「水を蒸発させることかつ」「正解です、水で体を冷やさせない為の知恵ですぬ」

「えげつねえ…」

「そうです、火竜は結構えげつないですよ」

「全くだ、強力なスチームになってかえって俺達を襲うかしょうがない『ウインドストーム』」

溜めて解放する、スコールは拡散し台風の目であるこの辺りには余り降らないだろう

「なんて魔力…やはり

ソウルイーターは伊達じゃありませんねっ」

「え、その名前定着させるきなっ!?」

「…少し」

「そんな…くっ、まあ今はそれどころじゃ無かった

…お前は大丈夫かつ!?」

「…かなり、不味いかもしれんな

早くけりを付けるか」

「どうやってっ!?」

「こっやってだ…

聞け、赤き韻竜よっ」

「なんです?」

「お前には分かりにくいかもしれんだが、その目をこらせっ

見えて来る物が有るはずだっ…」

「えっ?…じー

…へっ、もしかして」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1087r/>

とりあえず革命！？

2011年3月17日22時40分発行